

日本の製造現場に再生の切り札 高性能な設備と競争力を提供



専務取締役 **日高 明広**

インタビュアー **布川 敏和**

Company Data

日高グループ 日高機械

(株式会社 田辺鉄工所 株式会社 田鶴浜マシンウッド)

石川県羽咋郡志賀町徳田ス-4 TEL 0767-37-1311

URL: <http://www.retrofit.jp>

工作機械の設計・製造から、レトロフィット（中古機械を活用し精度と制御・機能を復元する）まで、機械に関わる幅広いご要望に応える『日高グループ』。1904年に研磨盤などの工作機械メーカーとして東京で創業してから100年以上、経験と技術、設備を活用。3万坪・8拠点・約70名の体制で邁進している。

布川 「日高グループ」の沿革から。日高「日高グループ」は、「田辺鉄工所」が1904年（明治37年11月1日）東京都墨田区で創業し、円筒研磨盤などの工作機械を製造していました。都内の3工場に加え、1944年から金沢工場を開設しました。都内の3工場は戦災で失いましたが、1962年に「田辺鉄工所」から独立した『日高機械』が、1982年には「田辺鉄工所」を引き継ぎ、志賀工場を開設しました。現在『田鶴浜マシンウッド』を加えた3社が一つのグループ企業として、工作機械や木工機械などの産業機械、レトロフィットと、お互いに競争しながらも協力して、それぞれの特徴と小回りを活かし、頑張っています。

布川 100年以上の歴史の中では様々なことがあったのでしょうか。

日高 ええ。一番大きな出来事と言えば、1953年に「田辺鉄工所」で製造した「万能機」が昭和天皇の天覧に預かったことです。そのときの写真も残っています。今でも大変名誉なことだと感じています。そもそも当社は、「日本中のものづくり業界から必要とされるように常に変化し、新しいものを提供し続ける」という理念を大事にしてきたんです。そして100年以上の歴史の中で、戦中には工作機械の製造から木材の加工機械へと業務内容を転換し、現在まであらゆる工作機械や産業機械を製造し、制御ソフト、

システムを進化させ続けてきました。世の中の変化に対応した新しい技術への挑戦こそが、当社が誇る歴史となっているのです。

布川 現在も木材の加工機械の製造がメインなのですか。

日高 現在は工作機械を主力として、金属加工以外の産業機械も作っており、日立製作所さんへ新幹線の車体加工機、式年遷宮で伊勢神宮様のご用材を削らせて頂く「道具」としての社寺仏閣建築用大型機械や、木工機械、建具・一般住宅用プレカット建築の機械、レーザー加工機、ロボットなど多岐にわたります。また現在では製品開発と製造で培った技術と特殊大型設備を活かして、石川県の「ニッチトップ認定企業」として、レトロフィットにも力を注いでいるんですよ。

布川 レトロフィットというのはどのような技術なのでしょう。

日高 中古の工作機械をオーバーホールするというだけのことでなく、その機械を素材として機械的精度の復元を行い、最新技術と機能を追加する。性能を大幅に向上させながら、信頼性も高め短期間で安く新造機械以上のものを創りあげることがレトロフィットです。中古機械の修理とは似て非なるものですし、これができる企業は限られていますね。

布川 技術力に絶対の自信を持っておられることが窺えます。

日高 技術力というよりは、独自性ではどこにも負けないと自負しています。外注による寄せ集めではなく、社内の特設設備を活かした設計と加工、制御技術、田舎の広い敷地。これらは長い歴史の中で受け継がれてきたものであり、目の前の業務とお客様からのご意見を参考にしながら磨き続けてきたビジネスモデルなんです。特にレトロフィット（精度復元・制御・配線の更新・最新技術の追加）は、昔の機械について学べる貴重な機会でありながら最新技術を最大限に活用する業務で、技術力を生かした独自性のさらなる向上につながっています。

布川 最後にこれからの展望を。

日高 今、日本のものづくりは震災や歴史的な円高、欧州の債務危機、水害、新興国の躍進、政治の混乱などあまりにもたくさん抱えてどんどんと海外に流れています。我々は小さく微力ながらも軸足を「国内のものづくり」に置き、失われようとしている技術の継承を行い、独自性を生かし、設備と技術を提供することで「再生日本」に貢献できるのではないかと考えています。安全・安心で付加価値の高い、ものづくりの現場で必要とされる「秘密兵器」、「道具」と言って頂けるような機械を造り続け、今後も変化し続けたいと思っています。

(2011年11月取材)

